

佐伯史談

第六十八号

「御土史研究」誌
通算第九十号

昭和四十五年九月廿九日

佐伯史談会

発行所 佐伯市大字稻垣字龍護寺羽柴方

研究

海部氏は海人族の首長

佐伯史談会

会員 佐 脇 貫 一

『延暦四年、豊後国海部郡大領外正六位上、海部公常山等、居職匪懈、撫民有法、於是詔而授外従五位下、並授摂津能勢、近江蒲生、丹波天田及海部四郡大領、皆賜爵一等。』

これは続日本紀の記録で、海部郡大領海部公常山がその善政と賞せられて位一等を進められた記事である。当時（七七一〜七九〇）佐伯地方といつても海部郡（現在佐伯、津久見、臼杵三市と南海部郡、北海部郡、大分市、坂ノ市、大在地区まで、但し宇目所を除く）の長官（大領）であつた海部公常山とはどのような系統で、どのような人物であつたのだろうか。

豊日志には『常山、久良磨之子、尋為郡司、自是世居焉』とあつて、神護景雲元年（七六七）豊後七代代官の國司（豊後守）として赴任して来た佐伯宿禰久良磨を常山の父

とし、久良磨が何かの理由で海部郡の穂門に着任したという記録と裏付けようとしている。かつて私は下堅田汐月の上ノ台遺跡を、海部氏居跡の跡ではないかと推定、昭和四十一年二月佐伯史談誌上にその考証を発表したが、その後海部氏の調査を進めるに従い、海部氏の本據は堅田上の台に限ってはならないという考え方が強くなった。本年四月佐伯史談誌第六十三号誌上に岩田

善市氏が『市福所の古塔の謎』と題して丹波天田郡の夜久氏の位牌を解明、これを海部氏と結びつけて、海部氏が丹波天田郡の大領であつた（続日本紀の記録を誤読）とし、市福所の古塔を夜久氏縁故の墓塔と解しておられる。岩田氏はこの文中に湯本氏系圖を引用し、湯本氏が海部氏の子孫になつて

本号内容

- 一 佐伯海部氏と海人族の首長（佐伯貫一）
- 二 佐伯 神位置五人組帳（羽柴 方）
- 三 佐伯 亦亦村大正屋文書（岡田 八）
- 四 佐伯 大日寺について（河野 典）
- 五 佐伯 前代洞観音堂について（高宮 昭夫）
- 六 佐伯 佐伯と国木田独歩（山本 保）
- 七 佐伯 源叔父より
- 八 佐伯 佐伯の港はいつな陽きとていつな陰（三浦 俊）
- 九 佐伯 佐伯港（つづき）（市野 隆仁）
- 一〇 佐伯 漁村の近蘭堂（安藤 若工門）
- 一一 佐伯 辰高知の峯は西にけぶりて（二）
- 一二 佐伯 佐吉御殿の城を見る（池船 集會）
- 一三 佐伯 集會案内・贊助等附録
- 一四 佐伯 新入会員紹介・会費消息等

いることはいささかの疑点もたず、これを海部氏の正系としてゐるが、私が佐伯史談第六十四号で明らかにしたように、この系図は故足田泉翁も指摘していた偽系図であり、どうして海部氏考証の資料にはならない。十余年前私は新聞紙上に「私どもの大分県」という通史を書き、海部氏のことについて「湯本系図には同氏が海部氏の裔であるとして常山前後の系統を載せ、

海部公金田丸 関麻呂 考雄 八代磨

常山——常野

と整然とした世襲系譜を記してゐるが、あまりにも作意が歴然としていてどうして古くから伝へられた系図と見えない。」と書いたが、太田亮先生の姓氏家系大辞典によつても、海部は池部、網部、川人部、磯部とも古代の職業部（伴部）で、漁獵航海を職能とする漁民（白水郎）の族称。とくに海部は安曇氏（アズミ）にひきいられて中国、四国、九州の海域で活動した部族という。すなわち海部公は海部族の首長の称であり、磯部公、錦部公、田部公などと共に伴部の首長の私称とされている。大分大学の富米隆先生が近著「卑弥呼」の中で指摘されてゐるように、古代の豊国（豊前、豊後）は海神族へ海人族としてもよいの根拠地であつた。海神族とは何か、古事記や日本書紀の摩訶神話に出てくる綿津見神の一族である。海神の雄豊玉比売は考火々出見尊（神武天皇の御祖父）の妃であり、その妹玉依比売は御子天津日高日子波限建鸕草葺不合命（ウガヤフキアエズ尊）神武天皇の御父君）の乳母であり、妃になつてゐる。この神話は天和朝廷の起元が西国（九州、中国、四国）の海岸部を中心と繁栄した海神族（わたつみ族）と深い関連をもつてゐることを示しており、出雲神族、宗像神族、宇佐

神族とよばれる氏族の象徴神を中心に集まつた民族の総合的名称が海神族であつた。

この海神族のうちで漁民を統轄したのが海部族で、氏族別からいへば地神綿津見神の子孫といわれる安曇氏の一族である。安曇氏は筑前国粕屋郡安曇郷に繁栄する一族といわれ、上代日本の海運を司どつた一族である。海部公は姓氏録の分類によると出自未詳の氏族となつてゐるが、この一族で天和朝廷に仕えたものは海部直（あまべのあたひ）の姓（かばね）を賜ひ、国連に準じた。地方に残つて海部公を称したものは県主（あがたぬし）として待遇され、姓制度の定まつた天武天皇時代以後は郡司、つまり郡大領に任ぜられた。

海部の名称は「アマベ」の反か「アマムベ」「アママリ」「アマルベ」などと読んでゐるが、同系統の名称は海士（アマム）、阿萬（アマム）、余戸（アママリ）、天迎（アマムベ）、餘戸（アマムベ）などがある。もつとも余戸、餘戸の場合大きな部民の別れた支邑の意味をもつものが多いが、中世以降はこれが混交されてゐる。

安曇氏発祥の地という筑前粕屋郡安曇郷は現在の福岡市住吉の地であるといわれ、地名辞典には筑紫郡海部郷と記し、住吉村であるとしてゐる。姓氏録には「地祇、安曇宿称、海犬養、海神綿積命之後也。又凡海連、海神男、秘高見命之後也。」として海氏の祖廟ありたる地なりとしてゐる。また尾張国海部郡の海部氏は後世「カイブ」又は「カイフ」と讀んだが、これは天背男命の後、尾張連と同祖で大海部直と称した。

こうした上代における海神族の繁栄から、海部の名称は全国的に残つてゐるはず、そこで試みに地名辞典で調べてみた。海部郡は私どもの住む豊後だけだが、海部郡（アマム）又はアママリ）は紀伊に、海部郡（カイブ、後海部

海東の二郡となる。は民張に在る。また隠岐に海士郡（アヘン）があり、郷名となると安芸、筑前、辰後、上総、淡路、伊勢、丹後、土佐、越前などに在る。海部の女まりとみられる餘戸の称は伊豫、周防、阿波、若狭、伯耆などに見られ、これを地圖にするとほぼ海部族の蕃拠した地域に在る。

さて問題は豊後国海部郡の首長であつた海部氏であるが、延暦四年の前掲の記録にまつてもなく、大和朝廷が、延暦四年の大化新制時代、奈良朝期から平安朝初期まで海部郡の主権を握つていた氏である。大分君や宇佐公は大化から平城初期にかけて中央政府に親近し、ともに国造としての地位を確保したが、海部公日ようやく平城初期になつて部族を統合、善政を布いたとして大領の地位を確保した。それでは海部公常山を中心とする海部氏の政庁はどこにおつたのだろうか。私は穂門郷の佐伯荘といふ推定から堅田郷上ノ台付近を想定していたが、先師佐藤鶴谷翁はこれを八幡地区戸穴に想定、海部族の拠点として上浦海岸（穂門）を指摘した。私は富来隆先生の説により海部郡の地理的版図を見直した。風土記の佐尉、佐和ニ郷、さらに丹生郷、それが海部族の拠点であつたとすれば、当然田耳生郷と思われる丹生地城があるいは臼杵市地域で發掘されてゐる前方後円墳、円墳などは海部氏の遺跡としてよいのであつかうか。古代の有才氏族海部族の国が海部郡一帯にあつたとしても別に不思議ではない。私も海部氏の遺跡を佐伯市近郊のみに求めていたのは誤りで自由奔放な古代民俗、私どもが祖先たちは豊後水道の沿岸を開拓して民衆のパラダイズを築いていたのであつたか。耶馬台国卑弥呼の國はその意味では海神族の連合國家、これを宇佐地方に比定するの無理ではないであらう。

(おわり)

研究

御仕置五人組帳

赤木村大庄屋文書の周也（その八）

会員 羽 柴 弘

（資料 三十五）

奉差上証文之事

兼而被 仰仕置候御仕置五人組御帳面今月廿四日大庄屋宅江村中総百姓末々之者迄不残呼寄読聞奉畏候御仕置急度相守申候依御請連判証文如件
安政五年五月廿九日

役 人 印
總 百 姓 印

進 上

（古讀み下し）

差し上げ奉る 証文の事

兼て御せ付仕置候御仕置五人組御帳面、今月廿四日大庄屋宅へ村中総百姓、末々之者迄、残らず呼寄せ読み聞かせ畏れ奉り候。御仕置急度相守申し候。御請連判証文の如し

（語法）

兼而—これはいわゆる寛保五人組帳で、佐伯藩では寛保三年十一月にはじめて布告されたもの（参照佐伯文書五十一号六頁）

御仕置—というときや死罪と感ずるが、この場合は一般政道を示したもので、庶民の守るべき道、御法度をさしている。その余文は

竹筒余書になつてゐること、文書五十一号四頁以下、五十一号五頁